

7月26日(土)から28日(月)まで、第58回自治体学校が、仙台国際センターや東北大学などで開催されました。2日目は津波や原発の被災地をめぐる現地分科会がありました。党議員団では、釘丸久子議員が「宮城・三陸海岸の復旧、復興」「いま」を考える」、栗山香代子議員が「原発被災地の「いま」を確かめる」に参加しました。

原発反対40年の高野博町議

釘丸議員の参加した分科会の現地案内は、女川町議の高野博さん。「震災復興ガイド」の尾形幹男さん。高野さんは、女川に原発が建設されると聞き、改めて東北大に入学し原発について学び、反対運動に。その後町議になり、原発に反対し続けて40年になります。「原発の危機から住民の命と財産を守る会」の事務局長もしています。女川町は、平成の大合併の時、住民の意向調査を行い、合併しないことを決めました。他の町々が



現地案内の高野博町議(左)と尾形幹男さん(右)

大きな市に吸収されて、大震災の復興支援が後回しにされています。しかし、女川町は独自に住民への生活支援金や漁業復興の補助金を支給し、がれき処理もしています。その財源は、原発立地自治体への交付金と原発固定資産税です。10年前までは、交付金等で豪華な建物を造っていましたが、方針を変え、百億円を積み立てました。それをいま、住民のために使っています。

住民の運動が

女川原発の大惨事を防ぐ

「守る会」では、「津波の引き潮の時、原子炉を冷やす海水をとれるのか」と追及。それにより国と東北電力は取水口の海底を10・5mまで掘り下げました。それが津波の遡上を食い止め、海水ポンプを水没させず、水素爆発や炉心溶解を引き起こす大惨事を防ぎました。震災後、東北電力は「海底が元のままだったから津波が敷地を超えただろう」と認めているそうです。

とっさの判断が生死を分ける

尾形さんは、一歩間違えば自分も津波に流されただろうと言います。仲間が「早く戻れ！行くな、行くな！」と叫んだから自分はここにいられた。

尾形さんは、当時は東北電力に勤めていたので、電力復旧の現状を聞きに各戸を回り、住民の惨状を目の当たりにしました。妻と孫を津波に奪われた男性は

号泣しながら「俺なんかどうなってもいいんだ！目の前でなんで二人を助けられなかったんだ！」と叫んだといいます。生徒全員が助かった向洋高校。本来は近くのお寺が避難所だったのですが、とっさの機転で校舎の屋上に逃げたそうです。



生徒全員が助かった向洋高校。屋上すれすれまで津波が来たという。

その一方で、児童108人のうち84人、教職員は13人のうち10人が死亡・行方不明となった石巻市大川小学校。市の防災計画で避難所と指定されていた。津波が北上川を非常な勢いで押し寄せ、校庭に集まっていた児童や教職員が、裏山に駆け登る暇もなく呑み込まれた。コンクリートの校舎はねじ曲がり、二階の渡り廊下が折れて地面に突き刺さっています。学校の入り口には慰霊碑が作られ、多くの人が慰問に訪れています。慰霊碑には花が溢れんばかりに飾ってありました。



慰霊碑の前で風車のカラカラという乾いた音が新たな涙を誘います。

今週の活動から



自治体学校の会場・仙台国際センターに行く途中の広瀬川の上で。歴史を感じさせる橋でした。(上：釘丸久子議員)

全体会の会場ホール、ステージ、スクリーンの前で。全国から千人以上が参加。(下：栗山香代子議員)

